

家族のあり方についての一考察

スウェーデンの養子の事例を通して

森 和子

（文京学院大学人間学部人間福祉学科）

〔問題と目的〕

スウェーデンは「家族のあり方についてまじめに試行錯誤を続けてきた国」という指摘がある。男女平等をはじめ、障害者、老人、移民などあらゆる面から平等化を政策として推し進めてきた国である。離婚再婚も多く、多様な家族形態が認められ親子のあり方も血縁を超え、血を分けた親子関係を重視しない養子縁組が多いことも特筆できる国である。不妊のカップルが子どもをもつ選択肢として国際養子縁組が固定している。養子はアジア、アフリカの諸国で出生した子どもたちであり、親子の間には生物学的絆はないのは明らかにわかる。しかし、彼らの間では、遺伝子や血縁といった自然のつながりより、日々の生活をともにしたつながりが親子の絆として大切にされている。しかし、現在のような血縁のない親子を含む多様な家族形態が認められる社会になったのは近年のことである。スウェーデンでも社会や家庭における男女の自由と平等がない家族のあり方が約50年前まで深く根付いていた。本研究では、古い血縁主義的家族観、児童観から現代につながる児童・家族観の過渡期に生まれ育った2人の元養子であった人たちから、生まれてから養子になり、育った経過について語ってもらうことを通して血縁のない養子と養親との家族の絆づくりのあり方を考察することを目的とする。

〔方法〕

調査対象は、スウェーデンの養子と里子の自助グループである AFO (Swedish Organization for adoptees and foster children) という会員200名ほどのNPOの代表者で現在50代のAさんと40代の会員のBさんの2名を対象にインタビュー調査を行った。インタビュー調査は、養子の出自を伝える「真実告知」を大きなテーマとして、生まれてから養子になり現在に至るまでの経過をライフストーリー・アプローチにより自由に語ってもらう半構造化面接で行った。2012年7月に、ストックホルムで調査を実施した。本研究では、Kirk (1984, 1988) の運命の分かち合い理論 (Shared Fate Theory) を理論的基盤とし、生い立ちの経過を養親からの真実告知を含め時系列に沿って語ってもらった内容を分析した。Kirk の運命の分かち合い理論 (Shared Fate Theory) の養親子の絆作りの過程で重要な3つの要素、1) 自分たち親子は、かけがえのない真の親子であると確信すること、2) 互いの気持ちに共感しあい、互いを必要とし助け合うこと、3) 理解するコミュニケーション能力を持つこと、を分析枠組みとして用いた。

〔結果と考察〕

本研究は、元養子の事例から血縁のない養子と養親との家族の絆づくりのあり方について検討した。調査協力者の2人の家族は、養子であることを秘密にした家族（クローズ）と生みの親のことも含めて家庭外でも養子であることがオープンな家族であり、家族間の関係性としては対照的な事例であった。Bさんは養子であることが秘密の家庭（思春期に血縁の兄弟の出現により養子であることを知る）で育つことの苦しさを抱えながら、大人になって生みの親と会ったことにより養親家族からは関係を切られ2重の喪失体験をすることになった。その後、自助グループで同じ境遇の仲間と出会うことで前向きに生きることができるようになった。一方のAさんは、養子であることは秘密ではない家庭で、養親の理解のもとで成人後に生みの親や元里親とも交流をもちながら生活をしていた。

2人の事例から血縁のない養子と養親との家族の絆づくりのあり方について分析した結果、①養親家族と生みの親家族も含めた家族の一員であることの確信をもち、②日常生活の中でのお互いへの思いの交流と積み重ねがなされ、③養子の生みの親家族に対する養親の肯定的な受け止めと養子自身の生みの親の事情への理解が進むことによって、より良好な養親子の絆づくりが促進されることが推察された。オープンな家庭で育ったAさんは現在養子や里子たちへの相談や支援を積極的に行っているが、クローズな家庭で育ったBさん同様、養親家庭に来るまでには生みの親を含め、何度かの喪失体験を抱えていた。養親の支えや自助グループの支援を得て、出自を知った時から養親家庭にくるまでに喪失していた自分のライフヒストリーを作り直す作業が行われていた。人生を再構築していくためには、生みの親との再会や交流を通して喪失体験を埋め、良好な関係性をもった養親の理解や同じ境遇の人たちの支援が重要であることが示唆された。